早期英語教育に関する学生の意識調査
――幼児保育学科学生に対する質問紙調査結果より――

A Report on Students' Attitudes towards Early Childhood English Education
――Based on Questionnaire Response from Students in Preschool Education Program――

田　中　敬　一

要約　民間の教育研究所の調査によれば、英語活動を通常保育に取り入れる幼稚園が急増しており、その動きは地方にも広がっている。このような状況の中、保育者を目指す学生がどのように早期英語教育を認識しているかを明らかにするため、卒業直前に質問紙による調査を行った。学生の 78% が英語に苦手意識を持っているにも拘らず、60% の学生が幼児・児童向けの英語に関心を示した。さらに興味深いのは、半数の学生が子どもに英語を教えてみたいという考えを持っていたことだ。早期英語教育に対しては、自らの体験から判断し設問に回答する学生も見られ賛否両論があったが、概ね肯定的な考えを示した。

Ⅰ　は　じ　め　に

2011 年度に小学校の英語活動、正確には外国語活動が小学校 5 年生から始まり、2020 年度までには小学校 3 年生から教科として英語を導入する方針が政府より示された。早期英語教育の推進にますます拍車がかかる様相を呈しており、家庭での英語教育熱にも少なからず影響を与えている。このような状況の下、保護者の英語教育に対する熱意に応えるためか、英語をカリキュラムに取り入れる幼稚園が少なくない。英語の早期教育に関しては賛否両論があり、決定的なピリオドはまだ打たれていない状況であるが、幼児英語教育が大都市圏を中心に急速に全国に広がっている事実は否定できない。ベネッセ教育総合研究所によると、2007 年度全国調査では、通常保育の時間に、クラス全員で一斉に行う英語活動を実施している私立幼稚園は 47% で、2012 年度の同調査では 58% にまで増加して

いる。地方ではどうであろうか。本学の位置する八戸市を例にとると、幼稚園の場合、八戸私立幼稚園協会に所属する23園中18園、率にして78%、認可保育所77園中20園、率にして29%が何らかの形で英語活動を保育に取り入れている。ホームページ上での調査であったため、英語活動が通常保育の時間帯で行われているか、課外活動で行われているかは検証できなかった。しかしながら、幼稚園での78%、保育所での29%は、決して少ない数字ではなく、地方においても、多くの子どもたちが幼児期に英語に触れていると言っても過言ではない。

II　目　　的

前述のように、保育現場で英語を教えている現状は、大都市圏だけでのことではなく本学の学生の多くが就職する地元の幼稚園、保育所においても同様である。今まさに保育に携わろうとしている学生が、どのように早期英語教育を捉えているかを明らかにし、本学での英語の指導の在り方を再考したい。幼稚園においても保育所においても、英語の指導はネイティブスピーカーが行っている場合が多く、学生が就職後幼児に英語を教える可能性は極めて少ないと筆者は考える。しかし、学生が勤務することになる職場の教育課程や課外教室に英語活動が含まれていれば、英語に全く無関係で職務をこなすということは考えにくいのである。また、外国人が実習園に在籍する場合、子どもとは当然のことであるが、その保護者や外国人講師ともコミュニケーションを図らなければならないことは容易に想像できる。幼稚園、保育所、小学校での英語教育を早期英語教育と捉えて、学生の意識調査を行った。

III　調査に関して

1.　幼児保育学科における英語について

本学幼児保育学科においては、英語は教育課程の教養科目に位置づけられ、幼稚園教諭二種免許取得のための必修科目となっている。「英語I」は1年生後期に履修し1単位、「英語II」は2年生前期に履修し1単位となっている。講義内容は授業の冒頭で、学生が興味を抱く英語の映画、幼児向けのチャンツ、歌などを毎時間導入教材として使い、その後教科書でListening, Grammar, 中心の学習を行っている。クラスサイズは1クラス50名前後である。

2.　調査対象の学生と調査実施日について

英語に苦手意識を持つ学生も多く、学力差も相当あるが、能力別クラスはとっていない。過年度生の比率は約1割である。出身高校は

主に青森県三八上北地区、岩手県県北地区に位置する公立、私立高校である。調査対象の学生は、平成25年度生、本学幼児保育学科95名（卒業数は96名）である。92%が保育業界に就職が決定しており、卒業を間近に控えた3月に、一教室で一斉にアンケートを行った。なお、回答数に関しては、実習を辞退した学生や無回答もあり、設問で異なることを付記しておく。

3. 設問内容

設問内容は全16項目で、学生自身、早期英語教育、実習園の3つの大項目から、それぞれ、6項目、5項目、4項目の設問をした。5スケール法で、設問16は記述式とし、学生の早期英語教育に対する自由な考え、意見を求めた。なお、バイアスの介入を避けるため、早期英語教育に関する賛否両論のいずれも紹介せず、本学の学生の考えをありのまま得られるように質問紙調査を実施した。

表1. 早期英語教育に関する質問紙

学生自身について	1	あなたは英語が好きですか。
	2	あなたは英語に対する苦手意識を持っていますか。
	3	あなたは英語のチャンツ、歌、絵本に興味がありますか。
	4	あなたは中学校に入学する前に英語を習ったことがありますか。
	5	設問4で「ある」と答えた人だけ答えてください。あなたはどこで英語を習いましたか。
	6	設問4で「ある」と答えた人だけ答えてください。あなたは英語を習ったことがその後の勉強に役立ったと思いますか。
早期英語教育について	7	2020年をめどに小学校3年生から英語の授業が教科として始まります。小学校で英語を教えることをあなたはどう思いますか。
	8	あなたは幼稚園・保育所で英語を教える必要性を感じますか。
	9	あなたは英語教育の開始時期はいつが最適だと考えますか。
	10	あなたは幼稚園・保育所で英語（チャンツ、歌、絵本の読み聞かせなど）を教えてみたいと思いますか。
	11	あなた自身が幼稚園・保育所で英語を教えることになったら不安を感じますか。
実習園について	12	実習園では英語を教えていましたか。(1) 幼稚園で　(2) 保育所で
	13	設問12で「はい」と答えた人だけ答えてください。 外国人が英語を教えていましたか。 (1) 幼稚園で　(2) 保育所で
	14	外国人の子どもが在籍していましたか。 1) 幼稚園で　(2) 保育所で
	15	実習園で英語を話す機会がありましたか。 例）先生と、保護者と、子どもと
その他	16	早期英語教育に関して思うことがあったら書いてください。

Ⅳ　調査結果と考察

図 1.　あなたは英語が好きですか（設問 1）

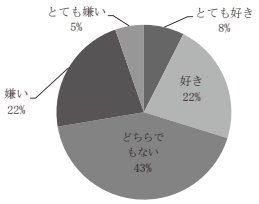


図 2.　あなたは英語に対して苦手意識を持っていますか。（設問 2）

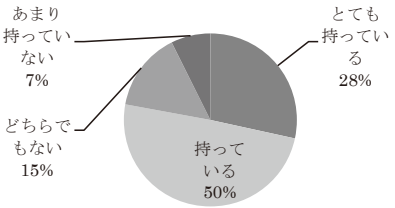


図 3.　あなたは英語のチャンツ、歌、絵本に興味がありますか。（設問 3）

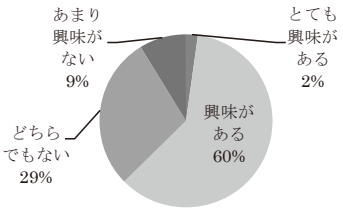


図 4.　あなたは中学校に入学する前に英語を習ったことがありますか。（設問 4）

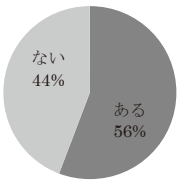


図 5.　設問 4 で「ある」と答えた人だけ答えてください。あなたはどこで英語を習いましたか。（設問 5）

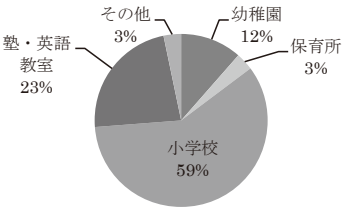
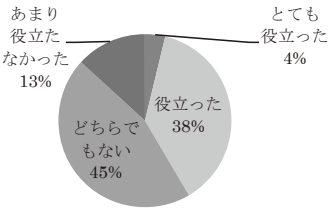


図 6.　設問 4 で「ある」と答えた人だけ答えてください。英語を習ったことがその後の学習に役立ちましたか。（設問 6）



ここで、三つの大項目の回答結果を分析する。まず、一つ目大項目の「学生自身について」では、設問 1「あなたは英語が好きですか。」において「とても好き」と「好き」を合わせて 30%、「嫌い」「とても嫌い」が 24%、「どちらでもない」が 43% であった。「嫌い」「とても嫌い」の 27% という数字は筆者にとっては予想外の数字で、学生の受動的な講義態度、資格試験の受験状況などを勘案すると、もう少し高い数字がでると予想していた。設問 2「あなたは英語に対する苦手意識を持っていますか。」では、英語に対する苦手意識を持っている学生が、「とても持っている」「持っている」の 78% とやはり高い数字を示した。つまり、英語は苦手であるが、英語そのものに対して拒絶反応を示すほど英

語が嫌いな学生は少ないと言える。このことは設問3「あなたは英語のチャンツ、歌、絵本に興味がありますか。」においては「とても興味がある」、「興味がある」で62%と非常に高い数字を示したこととも関連する。

講義で学ぶ英語に対しては、積極的とは言えない姿勢を示す学生が、内容が親しみやすく、身近な子どもの向けの教材に対しては興味を示し、積極的な姿勢を見せた。本学のほとんどの学生は子どもが好きで、保育者を目指し入学しており、保育に関する教材であれば、英語に対して苦手意識を持つ学生であっても興味を示したものと思われる。このことは今後の講義の在り方を考える際の参考ともなる。

小学校の英語活動が正式に始まったのは2011年であるが、2002年から「総合的な学習の時間」に、英語活動が一部導入され、2006年には小学校高学年に週1時間の英語活動の時間を確保することが文部科学省より提案された。調査対象の学生は、2004年と2005年に小学校高学年であったことから、提案の1年前に該当の学年に在籍していた事になる。設問4「あなたは中学校に入学する前に英語を習ったことがありますか。」では、中学校入学前に何らかの形で英語に触れていた学生は56%であった。設問5「英語をどこで習っていましたか。」の設問に対しては「小学校」が59%、塾、英語教室が23%、幼稚園、保育所が15%、その他が3%という結果であった。文部科学省の小学校英語活動実施状況調査結果概要によれば、2004年の全国の小学校における英語活動実施校は92%であったので、その格差は非常に大きいと言える。又、当時は英語活動を取り入れている幼稚園が少なく、塾や英語教室で英語を学んでいたことが分かる。

設問6「英語を習ったことがその後の学習に役立ちましたか。」では、中学前に英語を学習した学生の42%は、その後の英語学習に役立ったと回答しており、中学入学前の英語学習で成功体験をしたことが、ある程度読み取れる。一方、「どちらでもない」が45%、「あまり役立たなかった」など否定的な見解を示す学生が13%で、指導者やその他の学生を取り巻く教育環境などが原因で成功体験できなかったものと筆者は考える。

学生自らの成功体験の具体例、失敗体験の具体例を明らかにする事は、早期英語教育の研究上極めて意義があることであり、また、筆者の興味のあるところであるが、本稿では扱わず、次回の調査課題としたい。

図7.　あなたは小学校で英語を教えることをどう思いますか。（設問7）

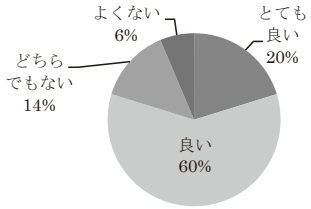


図8.　あなたは幼稚園・保育所で英語を教える必要性を感じますか。（設問8）

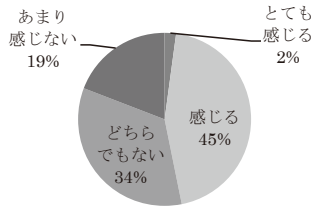


図 9.　あなたは英語教育の開始時期はいつが最適だと考えますか。（設問 9）

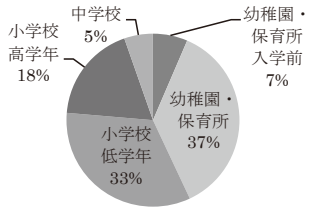


図 10.　あなたは幼稚園、保育所で英語を教えてみたいと思いますか。（設問 10）

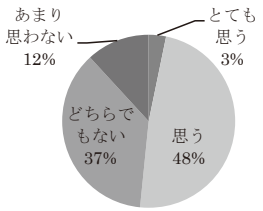
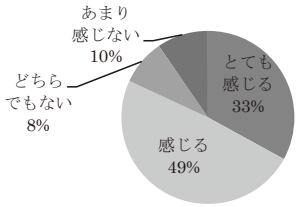


図 11.　あなた自身が幼稚園・保育所で英語を教えることになったら不安を感じますか。（設問 11）



二つ目の大項目である「早期英語教育について」では、学生の早期英語教育に対する考え方を 5 項目尋ねた。

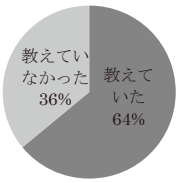
設問 7「小学校で英語を教えることをどう思いますか。」では、「とても良い」20%、「良い」が 60% で、学生の 80% が肯定的な考えを示した。「良くない」との反対意見は 6% にとどまった。大半の学生は、概ね小学校での英語教育には賛成しているようである。なお詳細は後述するが、設問 16 の記述回答では、自分の幼児期、児童期の体験から早期英語教育の是非を判断し、回答した学生がいることが分かる。反対意見は少数であったものの、日本語教育と関連して反対する学生がおり、真摯に設問に答えたものと考えられる。

質問を幼稚園、保育所での英語活動に移すと、設問 8「幼稚園、保育所で英語を教える必要性を感じますか。」においては、「とても感じる」2%、「感じる」が 45% と回答しており、この設問でも又、半数近くが幼児英語教育に賛成している。設問 9「あなたは英語教育の開始時期はいつが最適だと考えますか。」では、現行の小学校 5 年生よりも早い時期の「小学校低学年」が 33% で、「幼稚園、保育所」が 37% となった。後述する設問 16 の記述回答の意見と共に、英語の学習開始時期については、幼児期の幼稚園、保育所で英語に触れるべきだとの回答が多く見られた。

37% の学生が幼児から英語活動を取り入れるべきだと考えているが、自らが英語活動に携わることに関してはどのように考えているか。設問 10「あなたは幼稚園、保育所で英語（チャンツ、歌、絵本の読み聞かせ）を教えてみたいと思いますか。」という質問に対しては、51% の学生が、幼児向けのチャンツ、歌、絵本を教えてみたいと回答している。一方で、設問 11 で「あなた自身が幼稚園、保育所で英語を教えることになったら不安を感じますか」という質問に対しては「とても感じる」が 33%、「感じる」が 49% で、全体の 82% が不安を感じていると回答している。実際に幼稚園、保育所で行われている英語活動は主にネイティブスピーカーが担い、担任はほぼ関わることがない事に加えて、活動内容も園、指導者によりまちまちであることや、

何よりも、自らが英語を教えることなど想定していないので、予期せぬ設問に当惑した結果だと思われる。幼児、児童英語を学んでいない学生にとってみれば不安を感じるのが当然であろう。

図 12.　実習園では英語を教えていましたか。（設問 12）（1）幼稚園で



（2）保育所で

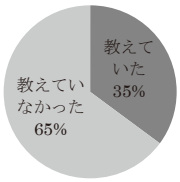
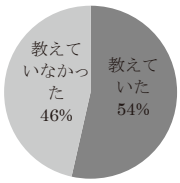


図 13.　外国人が英語を教えていましたか。（設問 13）（1）幼稚園で



（2）保育所で

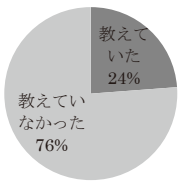
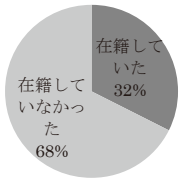


図 14.　外国人の子どもが在籍していましたか。（説門 14）（1）幼稚園で



（2）保育所で

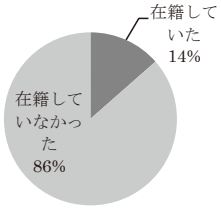
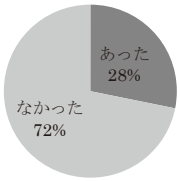
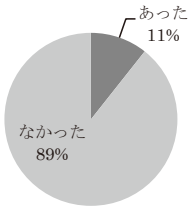


図 15.　実習園で英語を使う場面がありましたか。
（1）幼稚園で（設問 15）



（2）保育所で



三つ目の大項目「実習園について」については、 設問 12「実習園では英語を教えていましたか」という設問では、幼稚園では 64%、保育所では 35% という結果が出た。

設問 13「外国人が英語を教えていました

か」では幼稚園では54%、保育所では24%となっている。なお、学生は英語担当者が英語のネイティブスピーカーであるかどうかは、判断できないので、あえて外国人という表記にした。設問14も同様である。

設問14「実習園に外国人の子どもがいましたか」では幼稚園で32%が在籍していた、保育所では、14%である。

設問15「実習園で英語を使う場面がありましたか」では、幼稚園で「あった」が28%、保育所で11%となった。

昨年度の実習園の数は、幼稚園が50園、保育所が79園、地域は主に青森県三八上北、岩手県北に亘っている。本稿Ⅰで記述した通り、八戸市では78%の幼稚園が、保育所では29%が何らかの形で保育に英語を取り入れているが、幼稚園での数字の隔たりは、実習園の地域が広範囲に亘っていることによるものと考えられる。設問13「外国人が英語を教えていたか」、設問14「外国人の子どもが在籍していたか」、設問15「英語を使う場面があったか」も地域の特性、すなわち、外

表2.　早期英語教育に関して思うことがあったら書いてください。（設問16）

賛成	1	中学校になってから覚えるよりも、乳幼児の頃から継続的に関わることで苦手意識が減ると思う。	1
	2	小さい頃から日本語を覚えるように英語を覚えたら学校で習う時苦労しない。	1
	3	小さいうちから少しでも英語に触れていた方が良いと思う。	8
	4	英語は世界の共通語なので、学ぶ機会は多くあったほうがよい。	4
条件付賛成	5	英語を学ぶというよりは、遊びに英語を取り入れて楽しむのがよい。	1
	6	（難解なものを避け）チャンツのような遊びながら学べるものならば良い。	1
	7	教えるという言葉が引っ掛かる。使って楽しむ程度でよいのではないか。	1
	8	小学校で英語を教えて基礎を培うのは良いとは思うが、園児に教えると正しい日本語が話せなくなると思う。	1
	9	将来役立つ事もあると思うので、できるなら良いことだと思うが、幼稚園、保育所で学ばせる必要はないと思う。	1
	10	英語の前に日本語をきちんと教えたほうがよい。小さい時英語を習っていたが、覚えていない。外国の文化に興味を持つきっかけにはなった。だから、「教える」ことを目的とせず、英語に「触れ合う」ことを目的とすべきだ。	1
	11	教えるのは良いが、人材の確保が難しいのでは。	1
反対	12	私たちが受けていたような文法中心の英語を早期からやるのは反対だ。	1
	13	あまり早いうちから英語を教えるのは良くない気がします。日本語がある程度定着してからでも良いと思います。	2
	14	英語を教える前に正しい日本語を教えるべきだ。	2
	15	子どもに親からのプレシャーや期待をかけられる虞がある。	1
その他	16	簡単な単語もあまりよく覚えてないので、（教えることには）不安を感じる。	2
	17	その他	1

国人の居住する地域、又は人口の多い都市部に実習園があったことなどが、回答結果に大きく影響したものと考えられる。

以上の設問 12～設問 15 の回答結果からも分かるように、実習中に英語活動に触れ、子どもと共に英語活動を体験している学生が多くいる。

自由記述については全体の 3 割程度の 30 名の学生が回答した。内容が酷似している回答は一例のみ記載し他の回答は割愛した。なお、回答の文章に関しては、学生の意図するところを曲解しないために、文章に多少難があってもできる限り原文の通り転写した。

学生の意見を大別すると「早期に英語に触れた方がよい」という意見が多数を占めた賛成派と「早い時期は良いが内容を吟味すべきだ」という条件付き賛成派、「母国語への影響を考えると必要ない」という反対派に分かれた。早期英語教育に対して、学生なりに確固たる意見を持っている事が窺える。

V　ま　と　め

2011 年に始まった小学校英語活動導入を国が施策として打ち出されてから、児童英語教育に関しての関心が一気に高まり、研究活動も盛んになっている。児童英語教育に関しては賛否両論があり、長い間議論がなされてきた。その結論はこれからの長い期間に亘る検証結果を見なければならないこととなる。

幼稚園、保育所での英語活動についてはどうであろう。小学校の英語活動の波に押されて、目立たなくなってきた幼児英語教育ではあるが、着実に幼児教育の世界に浸透していると言っても過言ではない。英語活動を実施する幼稚園、保育所は今後ますます増え続けることが予想される。

質問紙調査に回答した相当数の学生は、英語活動を取り入れている幼稚園、保育所に就職している。否が応でも英語との関わりを持ちながら保育に携わっているのである。調査の結果、英語に対する苦手意識は持っているものの、幼稚園、保育所での英語活動に興味を示し、積極的な姿勢を示した学生が多くいた。また、多くの学生が中学校入学以前に英語を学んでおり、自己の成功体験から英語開始時期について、早ければ早いほうが良いと考える学生が多数見られた。一方母国語への影響を心配する学生も数名おり、学生の間でも賛否両論が見られた。学生が英語活動を担う事は考えにくいと先に記述したが、学生が英語に苦手意識を持っていても、学生時代に英語の基礎をしっかり身につけておけば、英語に係ることのできる保育者として、十分にその役割を果たすことができると筆者は考える。

参　考　文　献

1）　第 1 回　幼児教育・保育についての基本調査（2007）　ベネッセ教育総合研究所

2）第 2 回　幼児教育・保育についての基本調査（2012）　ベネッセ教育総合研究所
3）大津由紀夫（2013）「英語教育、迫りくる破綻」 ひつじ書房
4）八戸市ホームページ　子育て　子育て関連施設　幼稚園・保育所
http://www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/28,0,98,html
5）八戸市私立幼稚園協会ホームページ　ようちえんの広場
http://www.8-youchien.com/
6）文部科学省　小学校英語活動実施状況調査（2004）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/06032707/005/002.htm